

## 柳 宗悦の民芸論（XXII）

— 評価の視点 —

八 田 善 穂

### 目 次

- (1) 日本民芸展覧会
- (2) 第2回展覧会
- (3) 山中商会
- (4) 現代日本民芸展
- (5) 『手仕事の日本』

柳<sup>1)</sup> は昭和14（1939）年に発表した「「白樺」と工芸」<sup>2)</sup>で次のようにいう。

「工芸品への愛着は骨董的嗜好に終ると考へられ易い。実際至る所にかゝる弊害が見られる現状であるから、之がため工芸の存在は因循なものと取られ易い。それに近づく者は、品物を玩ぶ老人か、趣味に墮した茶人か、逸楽に逃避した人間のすることぐらゐにより考へない。未来に眼を向ける活々とした青年とは縁の薄い世界だと推量される。沉んや骨董を玩ぶ人は蒐集の癖に沈み、死蔵する傾きが多く、生活に明るい所が少い。この事実こそは益々工芸を二次的なものと考へる傾向を強めさせたと云へよう。この弊害こそ工芸にとって最も不幸な危険である。

だがそれは取扱ひ方の誤謬であつて、工芸そのものゝ罪過ではない。……工芸を骨董に陥らしめる者は、工芸を真に理解してゐる者ではない。不幸にも正しい蒐集家や茶人は今の世では稀の稀なのである。<sup>3)</sup>」

---

1) 柳宗悦（1889（明治22）－1961（昭和36））。

2) 『工芸』「日本民芸協会」第94号（昭和14年3月発行）所載、筑摩書房版全集（以下「全集」と略記する）第9巻「工芸文化」（以下「第9巻」と略記する）所収。

3) 全集第9巻，p.186。

たしかに「民芸」の語には、多分に趣味的な雰囲気漂う。「古民芸」となればなおさらである。しかし柳の民芸論は決して単に趣味嗜好の領域に留まるものではなく、生活全般に関わる精神文化論というべきものである。

本稿はこのことを、主に昭和初期における民芸品の展示活動に即して明らかにしようとするものである。<sup>4)</sup>

### (1) 日本民芸展覧会

昭和29(1954)年に発行された『日本民藝館』<sup>5)</sup>の中に次のようなくだりがある。

「昭和二年の六月に、私達は初めて民芸展を企て、それを東京の鳩居堂樓上で公開致しました。之は実に私共にとっては最初の記念すべき企てでありました。この頃が誠に民芸運動の揺籃期とでも申ませうか。次の表は、当時吾々が多忙に活動したことを物語ります。

……

昭和四年三月、京都に於て民芸展を催し、目録を発行し、又『日本民藝品図録』を刊行しました。

……

昭和五年五、六月、山中商会主催「日本民芸品展」が催されました。之は民芸品への注意が、早くも一般に拡げられたことを意味します。

……

昭和六年六月、新作民芸品展開催。東京。

昭和六年十一月、名古屋商業会議所にて民芸展、之は大きな会でありました。

昭和六年十月、東京にて日本古民芸品展。

……

---

4) 柳の著作は旧字体(正字体)、旧かなづかいによっているが、本稿では漢字のみ常用漢字に改めた(著作標題を除く)。

5) 日本民藝館発行、全集第16巻「日本民藝館」(以下「第16巻」と略記する)所収。

昭和九年三月，東京松坂屋にて日本民窯品の最初の大展観。

昭和九年十一月，東京の高島屋にて日本現代民芸品の総合的大展観。この二つの会は画期的な仕事でありました。<sup>6)</sup>」

この初めに述べられている鳩居堂の展覧会は，昭和2（1927）年6月22日から26日まで，最初の民芸展として開催された。

この会で柳達は彼等の見る正しい工芸を，物を通して直に語ろうとした。そこではどこにも在銘のものが無い。無銘の工人達はその仕事を示す。平凡な職人達が非凡な美しさを見せる。品物はそれまでたいした価値もつけられていない。しかしそれらが美しさを語る。貴族的な豪華な姿の代りに，質素な健全な体で並ぶ。彼等は反動的にこのことを企てようとしたのではない。見届けた美しさを率直に語ろうとしただけである。結果としては，認められない世界への弁護であり，またその開発であった。そこには在来の見方への補足修正が多分に含まれていた。望むところは新たな美の標準の提示であった。彼等は単に古い品物を弄ぼうとするのではなく，集めたものを誇ろうとするのでもなかった。

7)

「私達が見る健康な美に付て多くの人達と語りたかつたのである。定見を欠く今日の工芸界にとつて美学界にとつて，為す可き価値のある仕事と信じられた。或る人々には奇を好む偏頗な見方と取られて了つたが，私達は本質的なものに心を惹かれたのであつて，それを守護して宣揚することに私達の任務を感じた。<sup>8)</sup>」

このときの案内状（全文）は次の通りである。

「 日本民芸展覧会

本館の蒐集にかゝる日本民芸品の一部分を，今度鳩居堂主人の好誼により，第一回展覧会として公開する。私達は此会が有つ意義と特質とを左の如く列挙

---

6) 全集第16巻，pp.173-174。

7) 「民藝館の生立」（『工藝』第60号（昭和11年1月発行）所載）全集第16巻，pp.45-46。

8) 同書，p.46。

しよう。

一、こゝに集められるものは全部工芸品である。此内には民画をも含める。

(民画とは無名の画工によつて多数に出来た民衆的作の謂であつて、某性質上絵画たるより工芸に近い)。

一、工芸品の中でも、私達を選んだのは「民芸」である。民芸とは民衆から生まれた家常雑具の謂である。

一、従つて陳列されるものゝ大部分は、雑器として今日迄疎んじられてゐたものばかりである。

一、併し私達は此展覧会に於て積極的に、かゝる民芸にこそ却て豊かな工芸の美が現れてゐると云ふ事を主張する。

一、かくて此展覧会は埋もれた世界の新たな開発であり、認められない領域への強い弁護である。

一、それ故此展覧会は工芸の美に対する標準の明確な一提示になる。

一、従つて雑多なる作品の雑多なる陳列ではなく、一つの統一せられた工芸美の表示である。

若し是等の意義と特質とが工芸の将来に歩む可き方向を暗示し、又是等の作品が正しき工芸史への正しき資料として認知されるなら、此会の目的は達する。

昭和二年六月吉日

日本民芸美術館

(同人に代わり、柳 宗悦記す)<sup>9)</sup>

## (2) 第2回展覧会

昭和4(1929)年の第2回展覧会は、3月15日から17日まで、京都大毎会館で行われた。このときの『日本民藝品展覧会目録<sup>10)</sup>』には「此展覧会の特色

9) 全集第11巻、「手仕事の日本」(以下「第11巻」と略記する)、pp.723-724。

10) 全集第8巻、「工藝の道」(以下「第8巻」と略記する)所収。

に就て」および「蒐集余談」と題する記事がある。後者には次のように記されている。

「私達の買ひたいと思つたものは、一流の骨董屋等には決してありません。そんなものを置いては商売にならないからです。それで私達の友達は三流四流の骨董屋か、もつと下つて道具屋と呼ばれるものや、所謂「寄せ屋」と云はれるものでした。就中いゝのは最後のものです。兎も角奇態な現象でした。一番上等なるばつてゐる店には美しいものが非常に少なく、一番賤しい店が、一番頼りになる店だつたのです。私達は足も入れられないゴタゴタした埃だらけの下積になつてゐる処から、一番沢山いゝものを選び出しました。金襴等に包まれてゐるもので、いゝものはめつたにありません。<sup>11)</sup>」

「私達が買つた値段の事を少し書き添へておきませう。今度の会に並べてある信楽の大茶壺が一番高いのが一個五円です。安いのは老円五拾錢でした。幾年かの後には夢物語りになるでせう。伊万里の猪口は一個五厘と云ふのがあつたのを覚えてゐます。此頃でこそ行灯皿は拾円近くに上りましたが、私達が二三年程前に買ひ始めた頃は普通五拾錢並でした。北九州の大捏鉢緑釉指搔きのものは、京都の朝市で僅か貳円程でした。朝市を歩き廻つてゐる五六十人の骨董屋があればを貳円でも買はないのですから不思議なものです。屑糸織類は此頃やゝ上りましたが四巾のもの五拾錢から壹円です。船簞笥は片開きのものは始めは一個五円でした。煮染皿は其頃は一個五拾錢が恐らく高い相場だつたでせう。津軽地方の布古錦は一枚平均五拾錢で手に入りました。勿体ないと思ひます。<sup>12)</sup>」

週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史（上）<sup>13)</sup>』によれば、昭和5（1930）年の東京における標準価格米10キログラムの小売価格が2円30錢、駅弁（幕の内）が30錢、豆腐一丁5錢、国鉄山手線の普通旅客最低運賃（初乗り運賃）が5錢、新橋—大阪間の普通旅客運賃が6円5錢である。また昭和4（1929）年

11) 全集第8巻, pp.362-363.

12) 同書, p.365.

13) 朝日文庫, 1987年刊.

の銀行の初任給（大卒，第一銀行の水準）は70円，昭和6（1931）年の内閣総理大臣の給料（月額）が800円，小学校教員の初任給が45～55円，日雇労働者の賃金が1日1円40銭である。

一方，この昭和4（1929）年には藤田男爵家の入札が行われた。藤田家は当時日本で一，二を争う収蔵家であった。『骨董価値考<sup>14)</sup>』には次のように記されている。

「藤田男爵家入札は五月十日，大阪網島の藤田家本邸で行われた。下見は八日，九日の二日間を予定していたが，前評判が高く，特別招待日を一日加えたほどであった。会場として解放した藤田家本邸は，建坪2,000坪で当時，日本最大の和風住宅といわれていた。有職風の総檜造りで，藤田伝三郎<sup>15)</sup>が明治四十三年に自ら設計したものである。五月初旬の新緑に，つつじが咲き乱れた会場には，入札に関係のない物見遊山の客も多く，大変混雑したという。入札の世話人には，故伝三郎と交友が深かった馬越恭平<sup>16)</sup>が買って出た。

しかし，出品した品は藤田家の蔵品としては二番手，三番手の品であったから，東京の大手筋の益田鈍翁<sup>17)</sup>も根津嘉一郎<sup>18)</sup>も下見にこなかったという。それでも開札結果はさすが藤田伝三郎の蔵品で，東山御物夏珪筆山水図の一万九,〇〇〇円をトップに，一万円以上の品が六五点も出て，二八〇万円を売上げた。<sup>19)</sup>」

上位の品の落札値は以下の通りである。

- 1 東山御物夏珪筆山水図 139,000円
- 2 龔米筆淡彩秋景山水図山陽讚 80,000円
- 3 竹田筆驢背尋梅図 71,800円
- 4 中興名物翁茶入 69,900円

---

14) 光芸出版，昭和54年刊。

15) 1841（天保12）－1912（大正1）。

16) 1844（弘化1）－1933（昭和8）。

17) 1848（嘉永1）－1938（昭和13）。

18) 1860（万延1）－1940（昭和15）。

19) 『骨董価値考』，pp.151－152。

- 5 安南絞手茶碗 51,800円
- 6 青井戸雲井茶碗 49,110円
- 7 周銅饕餮紋卣 39,390円
- 8 呉春筆春景山水図 35,900円
- 9 藤原時代散蓮蒔絵錫縁経箱 33,989円
- 10 砧青磁浮牡丹香炉・銘縁淵 33,900円
- 11 青琅玕獅子紐共蓋方香炉 30,600円
- 12 仁清色絵菊水水指 30,000円
- 13 尚信筆中東坡左右飛泉三幅対 29,193円
- 14 安南絞手雲竜花入 28,900円
- 15 山陽筆水墨山水図 27,300円
- 16 唐津山椒向付五客 26,998円
- 17 名物唐物八島大海茶入 26,980円
- 18 時代蒔絵寢覚硯箱 26,900円
- 19 応挙筆中虚堂禪師躡南浦三幅対 26,200円
- 20 祥瑞反鉢 26,110円
- 21 名物古瀬戸浪花茶入 25,998円
- 22 染付辻堂香合 25,900円
- 23 名物此世香炉 24,110円
- 24 大雅堂筆白雲紅樹図 23,960円<sup>20)</sup>

藤田伝三郎については、次のようなエピソードが記されている。

「明治の入札の最後を飾る話題はなんといっても明治四十五年の生島家入札で、型物香合の王者、交趾大亀香合を九万円という驚異的な価格で、藤田伝三郎が入手したことであろう。新聞の号外が出るほどの大評判にもなった。

平瀬家から生島家に渡った大亀香合は、藤田がかねてより狙っていたもの

---

20) 『骨董価値考』, p.152。ただし当然これらの価格は当時としても破格のものである。因みに、やや時代が下るが、昭和12（1937）年に東京・高島屋美術部で開かれた「西洋骨董品展覧会」の目録には、2円から300円の品が記載されている。当時の公務員（高文合格高等官）初任給は月俸75円であった。

だった。この入札のとき藤田は、病床にあったが、交趾大亀香合の入手の知らせを受けると、ニッコリ笑って息を引きとったという。<sup>21)</sup>

前記『値段の明治大正昭和風俗史(上)』によれば、明治43(1910)年の内閣総理大臣の給料が年俸1万2千円であった。

藤田は天保12(1841)年、長州萩城下に生まれた。高杉晋作<sup>22)</sup>に従って討幕運動に参加し、維新後は大阪で軍靴の製造を始め、陸軍の御用商人となった。他に米の買占めなども手がけ、西南戦争<sup>23)</sup>では本業の軍靴やゲートル、軍服のほか糧食の用意も引受けて巨富を築いた。また戦後の疫病を予想して石炭酸を買占めると、見込み通り九州でコレラが流行し、これでも儲けた。さらに軍人や人夫の調達でも賃金を操作して80万円ほど儲けた。このことで人夫達がストライキを起こし、陸軍から詰問されたが、事件はウヤムヤに終わったという。西南戦争では、三菱の岩崎弥之助<sup>24)</sup>、大倉財閥の大倉喜八郎<sup>25)</sup>等とともに藤田は儲け頭であった。井上馨<sup>26)</sup>等の長州閥の庇護のもと、政商として藤田財閥を形成した。<sup>27)</sup>

### (3) 山中商会

柳は「民藝館の生立<sup>28)</sup>」の中でいう。

「再度の民芸展と、私のさゝやかな幾つかの著書とは、人知れず何かの動きを世に与へたと見える。物を慕ふ人達は此處に彼處にふえた。微妙なのはその経済を反影する道具屋の動きである。つまらない安物を買ふ仲間と笑はれ、金が無いから安物を美しいと云ひ出したのだと評されもしたが、その安物に未来

---

21) 『骨董価値考』, pp.61-62。

22) 1839(天保10) - 67(慶応3)。

23) 1877(明治10)。

24) 1851(嘉永4) - 1908(明治41)。

25) 1837(天保8) - 1928(昭和3)。

26) 1835(天保6) - 1915(大正4)。

27) 『骨董価値考』, p.62。

28) 註7) 参照。



を見た道具屋達が突如として各所に動き出した。……昭和四年五年の頃は異常な変動が起つた時期と思ふ。振り向きもしなかつた「下手物」を、好んで取り扱ふ店が急激にふえた。之に油を注いだのは実に山中商会の大規模な民芸品の展覧会であつた。……会は昭和五年五月及六月大阪、東京の二都市で催された。山中定次郎氏<sup>29)</sup>は骨董商として群を抜いた人と私はいつも思ふ。……その最高の「山中」が最下の品物を公然と大規模に取り扱つたのである。……それ以来大百貨店で「民芸展」「下手物展」と銘打つて如何に度々類似の会が開かれるに至つたであらう。<sup>30)</sup>

このときの目録の序文（「民藝品展覧会に際して」<sup>31)</sup>）では次のように述べられている。

「同じく工芸とは呼ぶものゝ、その中には明らかに二つの異つた流れがある事を見逃すわけにゆかぬ。此事が今日迄不思議にも明晰にされてゐなかつた為、工芸史家の立場や工芸美論の標準がいたく曖昧であつた恨みがある。<sup>32)</sup>

これらの二つの潮流はその基礎、領域および目的を異にするので、そこには混同はゆるされない。そしてそこに現われる美も顕著な対立を示す。この二つの流れは貴族的工芸と民衆的工芸とによつて代表される。一方を「官器」と呼ぶなら他方は「民器」とも呼べる。いわゆる「上手物」と「下手物」との区別である。<sup>33)</sup>

「後者を総称して「民芸」と名付ける、民間で作られ民間で使用せられる工芸を指すのである。此展覧会はかゝる民芸品の会である。<sup>34)</sup>

「「民器」は民間の協力で生れてくる工芸である。使ふ者も一般の民衆であり作られるものも主として日常品である。従つて多産品であり又廉価である。作者は職人であつて、とりわけ知識や主張を有つ人達ではない。用ゐるもの

---

29) 1865（慶応1）－1936（昭和11）。

30) 全集第16巻，pp.51-52。

31) 全集第11巻所収。

32) 同書，p.730。

33) 同。

34) 同。

は素材であり、工程も簡単であり、皆用途を旨として製産される。それ故悉く無銘品であり普通品である。個人的な作でない故自から伝統的性質を帯びる。同じものが幾つとなく反復される。人々はかゝるものを雑品として考へる。<sup>35)</sup>

また「山中商会」については、「山中商会古赤絵展を觀て<sup>36)</sup>」の中で次のように語られている。

「物がいゝにせよ悪いにせよ、あれだけの品を集める力に感心する。金があれば誰だとして出来ると思へば間違ひである。他にも有力な有名な骨董商は相当に沢山ある。があつてもあれだけの仕事をするのは今の日本では山中定次郎氏一人の様に感じる。たとへ商売であつても、結果からすれば商売以上の仕事をしてつてゐる。それはたしかに文化的な価値のある事業に迄高まつてゐる。こゝ迄商売を高める事は並の力量では出来ない。

……他の骨董商は同じ様な財力があつても、茶器と云ふ狭い世界に入り込んでゐる為、仕事が薄暗く、山中氏の様に商売以上の仕事にまで延び高まつてゆかないのだと思ふ。山中氏あつての仕事だと思ふ。骨董商の中で同氏の如きはめつたに出ない人であらう。眼のつけ所、腹のすえ所が他の人達とてんで違ふ。<sup>37)</sup>

山中は13歳のときから大阪の古美術商山中吉兵衛の店で奉公し、かたわら英語を学んだ。24歳で山中家の女婿となり、29歳のとき(明治27(1894)年)ニューヨークへ渡つた。ここで、かねてより日本で親しかったフェノロサ<sup>38)</sup>、モース<sup>39)</sup>等の助力を得て日本美術の店を開き、明治32(1899)年にはボストンに支店を開設し、さらにロンドンにも出店した。明治38(1905)年にはパリ、大正6(1917)年には北京、昭和3(1928)年にはシカゴにそれぞれ進出している。

山中商会は日本美術の輸出に加え、海外からも多くのものを日本にもたらし

---

35) 全集第11巻, p.731.

36) 『工藝』第35号(昭和8年11月発行)所載, 全集第12巻「陶磁器の美」(以上「第12巻」と略記する)所収。

37) 全集第12巻, pp.89-90.

38) Ernest Francisco Fenollosa (1853-1908).

39) Edward Sylvester Morse (1838-1925).

た、日本最大の美術貿易商であった。世界の東洋美術コレクションで、山中の手を経ていないものは少ないといわれるほどである。<sup>40)</sup>

#### (4) 現代日本民芸展

昭和初年の蒐集状況は次の通りである。

「蒐集の旅が始められた。吾々は三々五々折を見出しては各地に物を漁つた。<sup>41)</sup>」

当時は「下手物」という言葉も道具屋に知られていず、そのようなものの価値は全然問題にならなかった。それらを買う彼等が蔑まれた頃であった。それゆえあらゆる場所が処女地であった。そして彼等も実際何が見出せるかについては見当がつかなかった。どこへ行ってもすばらしいものが手に入った。しかもそれらは下積みにされて塵の積るままであった。彼等は驚くほどの安価で集めることができた。<sup>42)</sup>

「品物は私達が捜さずば殆ど顔を出さない。こちらが手を汚さずば塵の下から引き出すわけにゆかない。場所は大概はみじめな場末の道具屋である。その方が遥かに物が多かつたのである。<sup>43)</sup>」

「地方工芸の勃興を計る為には予め各地にどんな伝統が残りどんな作品が今尚出来てゐるか、此のことの調査が極めて必要である。<sup>44)</sup>」

民芸は地方的なものとして育てられねばならない。彼等は日本の民芸の現状を知るために、たびたび旅に出た。

「幸にも私達が之を企てる為に、二回最も大きな機会に恵まれたことを記しておきたい。それに其の結果の報告ともなつた二つの会は、私達が今迄試みた

---

40) 別冊『太陽』「海外へ流出した秘宝」平凡社、昭和52年11月刊、pp.129-131参照。

41) 「民藝館の生立」、全集第16巻、p.44。

42) 同。

43) 同書、pp.44-45。

44) 同書、p.60。

最大の展覧会であつた。……

一つは……上野松坂屋で「日本現代民窯展」を開いたことである。会期は昭和九年三月十二日から同十九日迄であつた。……

私達は北は奥羽から南は薩州に至るまで、様々な窯場を訪ふた。蒐集したものの総じて九千点を越える。而もその殆ど一切が嘗て此の百貨店で取り扱はれたことの無い品である。又それ等の物に付てはどんな陶書にも記述らしき記述がないのである。……

越えて同年十一月十六日から廿三日まで東京高島屋で「日本現代民芸展」が企てられた。……此の会は啻に陶器のみではなく民芸全般に亙るだけ、更に大規模の企であつて、私達は再び殆ど日本全土に調査の旅を続けた。……私達は日本の各地で如何に伝統がまだ活き、如何に特色あるものを多く作りつゝあるかを知ることが出来た。……集めた品物は二万点にも及んだであらう。殆ど二度とは繰り返し得ない膨大な会であつた。<sup>45)</sup>

昭和9（1934）年3月の「現代日本民窯展」の案内パンフレットには、次のように述べられている。

「各種の焼物の中で或層のものにだけは今尚見事な品が残つてゐる。それはいつも下積みにされてゐる雑器の領域で、大概の人はそれ等の品物や又窯場の事を知らないでゐる。需要が主に地方的な為、めつたに都迄は届かない、それにかゝる民器は最初からつまらぬ物と考へ込まれてゐるので、尚注意されずに終つたのである。<sup>46)</sup>

しかし彼等からすれば、現に日本で焼かれている品物では、雑器の類に最も健康な美しさをもったものが多い。かえりみられないために、この領域には時間の推移が少なく、昔のような着実な作り方が今も続いている。日本の持ち味が一番よく出ている点でも民窯には特筆されるべきものが多い。<sup>47)</sup>

「各地で出来る是等の品を一緒に集めて展観した事は嘗て無いので、恐らく

---

45) 「民藝館の生立」, 全集第16巻, pp.60-61.

46) 「現代日本民窯展に就て」, 全集第12巻, p.148.

47) 同。

焼物好きの人にできへ目新しい会であるに違いない。48)」

また同年11月の「現代日本民芸展」に際して発表された「地方の民藝49)」には、次のように記されている。

「私達は日本の各地に生ひ育つた民芸品を求めて長い旅を続けた。北は津軽から南は薩州にまで及んだ。固より古い作物の探索ではない。現に何が作られてゐるかを知る為であつた。50)」

どの地方の人達も彼等のような訪問者を迎えたことはなかつたようである。また彼等の心を惹くものに留意する人も極めて少なかつた。

「県の出版物も、陳列所の品物もよい指導にはならなかつた。吾々は大概の場合自ら倦まず歩くより仕方がなかつた。51)」

「店にも色々あるが、地方の特色を一番手近に察知するのは是非とも寄りねばならない場所がある。いつでも店の格で一番下積みにせられる荒物屋である。こゝは吾々には匿れた倉庫である。……山間や奥地の村々で日常使ふ品物が一通揃へてある。地方を知ることゝ荒物屋を知ることゝは屢々同じ意味さへある。52)」

各地で集めたものを見ると、ほとんど皆昔とのつながりをもつものばかりである。新しく工夫されたもので美しいものは極めて少ない。伝統を背負うものの方が、美しさで優る。地方の生活から湧き出た純日本のものに勝ち目が多い。背後に十分な準備がなされているからである。53)

「自然と歴史と生活との綜和が其れ等のものゝ根柢に潜む。都会から田舎へと洪水のやうに流れ込む商業的な品物には、そんな背景がない。正しい品物が其れ等のものゝ中に見付からないのも無理はない。54)」

---

48) 「現代日本民芸展に就て」、全集第12巻, p.148。

49) 『工藝』第47号(昭和9年11月発行)所載, 全集第11巻所収。

50) 全集第11巻, p.288。

51) 同。

52) 同書, pp.289-290。

53) 同書, p.291。

54) 同。

作物に正しさを求めて捜すと、何よりも地方の民芸が優位を占める。それらはまだ用に忠実な仕事をしている。

「利の為には凡てを犠牲にすることを厭はない都市の工場からは、決して正しい品を期待することが出来ない。地方の民芸を訪ねるのは、正しい工芸を探る意味がある。<sup>55)</sup>」

そこには借り物がない。日本で咀嚼され、産まれた工芸である。民芸で今なお日本を語れるのは日本人の特権である。それらは地から産まれた工芸であり、最も正当な工芸である。<sup>56)</sup>」

「何故其の土地に与へられた材料と手法とを活かして進まないのか。其れより健全な進み方があろうか。地方の工芸のみが工芸ではない。併し其の喪失は工芸の重要な部門の喪失を意味する。<sup>57)</sup>」

物が正しいか、誠であるかが問題である。此のことからすると、地から生れ出た郷土のものに、工芸として正しいものが多くあることに気付く。都会の工場から生れるのものには偽瞞が多い。皆商業主義の犠牲である。<sup>58)</sup>」

「都市が地方を害ふべきではなく、地方が都市を救はねばならぬ。生活の変化はやがて民芸の外形を変えるであらう。当然さうあつていゝのである。只変わらないのは美の法則である。姿は変つても、民芸に潜む美に古今はない。<sup>59)</sup>」

この「地方の民藝」が掲載された雑誌『工藝』第47号<sup>60)</sup>は、翌昭和10(1935)年4月に「現代日本民藝展覧会」として増刷された。その際載せられた「現代日本民藝展 其の意義と使命」(全文)は次の通りである。

「一 此処に集めたものは日本の各地で今も作られ現に売られつゝある各種の民芸品である。其れ故是は日本民芸現状の報告である。

一 凡てのものは伝統的作物であつて、個人の所産ではなく長い歴史の堆

---

55) 全集第11巻, p.292.

56) 同。

57) 同。

58) 同書, pp.292-293.

59) 同書, p.293.

60) 註49) 参照。

積である。かゝる意味で何れも純日本の品物と云ふことが出来る。

- 一 是等のものは其の土地固有の材料と特殊な技法と習慣的需用との結合から成つたものである。其れ故何れも地方的に発達した工芸である。
- 一 凡てのものは一般民衆の日常生活に役立つ為に作られた品物である。用に即した器物と云ふ点で、一番工芸本来の性質を現はしたものと云つていゝ。
- 一 是等の品物の中には近代の生活にはもはや合はず、其のまゝでは亡びる運命のものがある。併し同じ材料と手法とを活かして、新しい用途に振り向ける事はさして難事ではない。例へば編笠があつたとする。其のまゝでは用途が少ないが、是を平なものに改めれば敷物とならう。姿を僅か変へることによつて新しい用途は限りなく拡がる。
- 一 何れも手工品であつて多くは家庭か又は小規模の工房から生れたのである。機械工芸に対し是等の手工芸を只過去のものに見棄てる人もあるが、吾々は是等のものが並立して将来存在することを疑はない。手工芸の価値と必要とは決して亡びるものではない。
- 一 是等の品物の現状を見ると、日本には如何に未だ優れた職人が多く、手工芸が活々としてゐるかを知ることが出来る。此の領域が既に衰へてゐる西洋の事情に比べて吾々の有つ特権は大きい。此のことを活かすことは日本の工芸界に与へられた一つの使命である。
- 一 是等の品物を只新しい骨董品に過ぎぬと考へる人達もある。併し吾々の本旨とするところは徒らに其の美を回顧することではなく、寧ろ是等のものを産みの親として品物を未来に育てることにある。
- 一 何れも職人達の仕事であるが、新しい開拓に対し彼等には熟達した技術のみあつて独創的考案が乏しい。それ故民芸を未来に発達せしめる為には是非とも個人作家との協力が必要である。この提携こそ将来の希望ある大きな課題である。
- 一 何れの品も其の地方の産業として発達したものであつて、其の消長は農村の経済生活に重大な関係がある。各地には今や職を失つた者が無数

にある。此の際地方の手工芸の価値を閑却して此の疲弊を救ふことは出来ない。民芸の発展を重要視する所以も此処にある。此のことに關し吾々は特に經濟学者や社会思想家達の考慮と助言とを切望する。<sup>61)</sup>

## (5) 『手仕事の日本』

『大日本骨董全書（和漢骨董全書）』という書物がある。昭和7（1932）年に発行され、854ページに亙る骨董辞典である。<sup>62)</sup> 内容は古書から武具に到る19篇から成る。

このうち第14篇 陶磁器の項には、日本のものとして188種が掲載されている。そしてその中のいくつかは柳の『手仕事の日本<sup>63)</sup>』でも取り上げられている。以下それらについて両者の記述を対比する。『手仕事の日本』は昭和15（1940）年前後の現状が述べられているもので、当時の実用品の紹介である。

対比に際しては『全書』の記述をA、『手仕事』の記述をBとし、北から南への順とする。

### 1 相馬焼（福島）

A 「相馬郡中村町に製産する陶器の名、慶安初年即ち今から二百八十年前の開創、藩主相馬儀胤の臣田代源五右衛門信清、藩主に従ひて上洛のとき、君命により時の陶工野々村仁清に就き、製陶の術を学ぶこと七年、遂に其秘伝を得て名を清治右衛門と改めた、これ元和九年即ち今から三百五年前であるが、二代目に至りて更に研究を積み、原の町、雲雀原に於ける走馬を描くと同時に、製法をも改良し名を相馬焼と改め、今日に至るまで十二代である。最古のものは走馬を画かず、且つ無印の物が多い。只往々相馬氏の紋所九曜を命ずるものがある。<sup>64)</sup>」

61) 全集第11巻, pp.743-744.

62) 玉椿荘楽只編, 大文館書店刊(以下「全書」と略記する)。

63) 靖文社, 昭和23年刊, 全集第11巻所収(以下「手仕事」と略記する)。

64) 全書, pp.351-352.



B 「昔から磐城の国の相馬焼は有名でありました。窯は原町に近い中村にあります。馬の絵を描くので誰も知ってゐるものであります。相馬の地は馬の産で名があり、野馬追の祭や三春駒など、馬に因んだものが多いのであります。慣れた図柄ですから焼物の上にも上手に描きます。ですが好んで作る急須や湯呑などは、形が崩れて了ひ、品物としては上出来とは申されません。併しこの窯は昔は中々よい雑器を焼きまして、その青土瓶や絵土瓶などは忘れ難いものであります。もつと実際に使ふ台所道具に帰るなら、又昔の息吹を取戻すであります。浪江近くに一基の窯があつて、海鼠釉を用ひます。鉢だとか搦鉢だとか片口だとかに、しつかりした品物を見かけます。<sup>65)</sup>」

## 2 笠間焼（茨城）

A 「西茨城郡笠間町の一部の手町で製出せらるる陶器、山口勘兵衛と云ふものが、天保年間即ち今から約九十年前頃に創始したので、飲食用雑器が主である。<sup>66)</sup>」

B 「稲荷神社で有名な笠間は、窯場のある所であります。筑波山を真近くに見ます。昔から雑器を焼きましたが徳利や蓋付壺などに見るべきものがあります。<sup>67)</sup>」

## 3 益子焼（栃木）

A 「芳賀郡益子町大塚啓三郎が開始の陶器、頃は嘉永六年今から八十年前の事である、製品は土瓶類が主である。<sup>68)</sup>」

B 「益子は東京に一番近い大きな窯場とて、東京の台所で用ゐられる雑器の多くは、この窯から運ばれます。鍋、行平、片口、搦鉢、土瓶、火鉢、水甕、塩壺など様々のものを作ります。中で一番盛でもあり又よい

---

65) 手仕事, p.46.

66) 全書, p.340.

67) 手仕事, p.36.

68) 全書, p.374.

仕事ぶりを見せたのは土瓶の類であります。山水や四君子の絵を好んで描きます。黒の線描に緑や飴色を差します。一日に何百と描くその技の早さは見ものでさへあります。中に「窓絵」と呼ばれ、白い丸を窓のやうに胴につけ之に梅の花などを描いたものがあります。簡単であり乍ら美しいやり方であります。近頃はどこの陶器も絵が少なく且つ拙くなつてゐますので、この益子の絵土瓶の如き今では大切な存在であるといはねばなりません。この窯で出来る火鉢に流釉のがありますが、巧妙な技を示します。<sup>69)</sup>」

#### 4 九谷焼（石川）

- A 「此陶器は、加賀国から産出する陶器の総称で、春日山焼、若杉焼、吉田屋焼、宮本屋焼、小野焼、蓮台寺窯、永楽窯などがある。宝永年中即ち今から二百二十四年前頃、大聖寺城主前田利治其臣田村権左衛門に命じ、江沼郡九谷村の地に開窯せられたのを最初とする、其製作瀬戸焼に似て居るが、茶壺、水差など殊に珍重された。其子利明も又陶製事業に心を致し家臣後藤才次郎を肥前の有田に遣し、大に研究する所があつた、今日古九谷と称するものは、交趾と、有田に模したる物を云ふのである、のち衰微した。文化七年即ち今から百二十四年前、吉田屋伝兵衛なるもの開窯して陶業を再興した、同十一年には窯を山代村に移し、九谷の土を以て製作した。之を吉田屋窯と称するのである。時の画工飯田八郎右衛門、支那の画風にして陶器画の様を一変した、即ち赤色絵を製作することにした、之を八郎画金襴と称するのである。のち大蔵清七、浅井幸八郎（相鮮一亭毫）等が相図つて今日の隆盛を致したのである。<sup>70)</sup>」

- B 「加賀第一の名物は「九谷焼」であります。伊万里焼と相並んで日本の磁器の双壁であります。藍絵の染付もありますが、特に赤絵で名を広

69) 手仕事, p.38.

70) 全書, pp.345-346.

めました。九谷焼は支那の影響を受けているためか、伊万里焼のやうな優しい美しさではなく、どこか大陸的な骨つばいところがあります。絵にも格のはつきりした楷書風な趣きが見えます。仕事は江沼郡が中心であります。

九谷の色料は甚だよく、素地の良さと相待つて優れた品を生みます。只惜しい哉、赤絵の生命となる絵付けが昔ほどの格を有たなくなりました。そのためどんなに見劣りがすることでありませう。名手が出て息吹を取戻す日が待たれます。九谷の未来には希望を抱かざるを得ません。<sup>71)</sup>

## 5 大樋焼（石川）

A 「金沢市大樋町から産出する陶器名で、天和年間即ち今から約二百四十年前、京都の楽焼第四代吉左衛門一人の弟子長左衛門の開始に係るもの、其製は楽焼に倣ひ点茶用の茶碗を製したるが最初である。その子孫道忠に至り藩主前田侯に従ひ、明治二年東京に移たが、明治十七年再び金沢に帰り、春日町に窯を築きて今日に至つたのである、其製品は大抵茶用及び会席用品である。<sup>72)</sup>

B 「加賀の焼物としては「大樋焼」があります。楽焼風なものを作ります。窯は金沢の市内に在ります。茶器の類は末期を思はせませんが、雑器として作る赤楽風な「火消壺」は、長方形のもので、中々品がよく、どんな座敷に置かれてもよいでありませう。<sup>73)</sup>

## 6 赤津甕（愛知）

A 「これは陶器の焼方の名であるが、加藤四郎左衛門の十八世藤兵衛承岳翁が製出に係るもので、尾張国瀬戸の隣村赤津へ住したる時である。

---

71) 手仕事, pp.91-92.

72) 全書, p.339.

73) 手仕事, p.92.

此陶器を古仁兵衛とも称するが其訳は、当時重承は仁兵衛と称し、のち瀬戸に帰り兄の跡を相続せる故である。十九世以後仁兵衛と呼ぶは此人から始まつたのである。<sup>74)</sup>

B 「瀬戸の一翼をなすのは赤津であります。ここは所謂「織部焼」の本場と称するところで、今も盛に作ります。<sup>75)</sup>

## 7 織部焼 (愛知)

A 「天正年間即ち今から約三百五十五年前、古田織部重勝が茶道の余暇、遊戯として焼ける陶器の称であるが、中にも古織部は絵太くして萌黄葉あるものを珍重する。織部焼は古来あるもので、最初は鳴海焼と呼ばひ、織部正以後を織部と云ふのである。古織部とは、香合の土にて作り、瀬戸の葉をかけ、鳴海の窯へ入れた物の称である。<sup>76)</sup>

B 「昔茶人であつた織部正重然の好みの焼物だといひ、鉄で簡素な紋様をあしらひ、所々に緑の色を垂らしたものを指します。全く和風な好みの濃く現れてゐる焼物であります。只近頃のは緑の色が悪くなりましたのと、形を態々曲げたりするのとで、横道にそれた仕事に落ちました。もつと素直に作つたらさぞよくなるであります。<sup>77)</sup>

## 8 志野焼 (愛知)

A 「文明年間即ち今から四百五十九年前、志野宗信が瀬戸の陶工をして製作せしめたものである、宗信は足利義政の臣で、秀道志野流の元祖、茶を好みたるが故に意に此事をしたのである。絵画あるものを絵志野焼と謂ふのである。<sup>78)</sup>

B 「織部といつとも一緒に挙げられるのは「志野」と呼ばれるもので、半透

---

74) 全書, p.328.

75) 手仕事, p.80.

76) 全書, p.339.

77) 手仕事, p.80.

78) 全書, p.357.

明な厚い白釉の下に、鉄で花や草などを簡素に描いた焼物であります。之も云ひ伝へでは茶人志野宗信の好みに出たものといひます。支那や朝鮮にない大和風な焼物を代表します。ですが之も近頃のは態とらしく凝つたもの多く、感心致しません。今はなくなりましたが美濃の笠原あたりの窯址から出る雑器を見ると、「織部」も「志野」も趣味の犠牲ではなかつた時代のあることを語ります。<sup>79)</sup>」

## 9 犬山焼（愛知）

A 「丹羽郡犬山町の産出、一に丸山焼とも称して居る、其製作は支那の呉須及び赤画を模したるもので、又京都の尾形乾山風に倣ひ、桜楓を画き、主として酒器などを製出した。裏面に犬山との押印がある。文政年間即ち今から百十年前の開創である。<sup>80)</sup>」

B 「尾張の国では窯場として犬山があります。陶器に赤絵を施した焼物として名を広めました。併しいつも絵に生気が乏しいのを残念に思ひます。<sup>81)</sup>」

## 10 常滑焼（愛知）

A 「知多半島の西海岸、常滑町に産する陶器の称、天正年間即ち今から三百五十年前頃の開窯である、其質甚だ粗で赤味を帯び、釉法も又巧妙でない、最初の程は素焼の瓶類ばかりであつたが、のち真焼と称する黒色の南蛮風のもの焼き、専ら酒器急須等の如き日用品を製作した。天保年間には、陶然赤井新兵衛、白鷗村上八兵衛、三光松下恒義等の名工が出た、今も尚盛んに製して居る。<sup>82)</sup>」

B 「知多半島に常滑があります。ごく薄く釉薬をかけた赤褐けた焼物であります。急須だとか皿や鉢など小ものも焼きますが、近頃は土管の仕

---

79) 手仕事, p.80.

80) 全書, p.334.

81) 手仕事, p.81.

82) 全書, pp.366-367.

事が専らで、見るべき品が少なくなりました。<sup>83)</sup>」

## 11 信楽焼（滋賀）

A 「甲賀郡信楽荘長野村から製出さるる陶器の称で、我国最古の窯なるも開創の年代不詳であるが、仁安、嘉応の頃と推せられ、今から約七百年前頃である当時の製品は壺、雑器に過ぎぬ、之を古信楽と称するのである。永正、弘治即ち今から四百年及至三百七十年前頃から、茶道起りたるが為に茶器を製作した、之を紹鷗信楽と称するのである。のち其時代時代により利休信楽、宗旦信楽、遠州信楽、空中信楽、仁清信楽、新兵衛信楽などの名称があるのである。<sup>84)</sup>」

B 「江州のもので最も注意すべきは信楽の焼物でありませう。歴史の起りは甚だ古く、それに室町時代から茶人との縁が深かつた窯であります。その地方は松の多い山間の部落でありますし、周囲の丘は皆これ陶土であつて、窯が栄える事情がよく備はつてをります。ここで出来る品で最も有名なのは茶壺でありました。随分大型のものを作りますが、どう運ばれたのか非常に遠出をして、日本全国の葉茶屋の店には、是等の大壺が二つや三つ置かれてゐない場合はないまでに広まりました。仕事はごく最近まで続いてゐたのであります。日本の陶器の大型のものとしては代表的なものでありませう。好んで流釉を施しますが、最も多く流布されてゐるのは白地に緑を縦に幾條か流したものであります。

この信楽は近年は海鼠釉の大火鉢で名を挙げました。持映されて、之も販路の広いのに驚きます。ですがこの窯で特に賞めてよいと思はれるのは、不透明な厚い白釉であります。味が温かで静かで、時にはほんのりと「ごほん」と呼ぶ桃色の斑が中に浮びます。この白釉で長方形の深めの流を作りますが、信楽以外には決してない品であります。同じこの白で甕に取りつける朝顔を作りますが見事な形の見かけます。信楽の

83) 手仕事, p.81.

84) 全書, p.355.

一部をなす神山はその土瓶でよく知られました。特に山水を描いたものが持映され、土瓶絵としては一つの型にまで高まり、後には多くの窯で之を模するに至りました。例へば野州益子の如き、明石の如き、又遠く筑州の野間の如き、その流れを汲みます。雑器に於て信楽の仕事は甚だよく、その他土鍋、植木鉢、湯婆など、ここの品には使ひたいものが多々あります。<sup>85)</sup>」

## 12 伊賀焼（三重）

A 建武年間即ち今から約五百九十年前、阿山郡丸柱村で創製せられた物、故に丸柱焼とも称するのである。其地江州の信楽に接近するが故に何となく信楽焼に似て居る、千利休に前のものは水差及び花瓶であつたが、茶道の大家小堀遠州一たび此地の陶工に命じて茶器を作らしめたが、其製何れも薄手で巧妙、之を遠州伊賀と呼んだ。国主藤堂公の命に成れるを藤堂伊賀と称して区別を立て、共に世に珍重された。器の裏に豎一寸八部、幅一寸程の印を捺す、之を下駄印と呼んだ。今日の伊賀焼は、丸柱の三十余窯以外に、玉瀧村の槇山、玉瀧、河合村の石川等にも之を産出するに至つた。槇山は天保時代即ち今から九十七八年前、石川は明治初年の開窯である。<sup>86)</sup>」

B 「伊賀の名を負ふもので最も有名なのは「伊賀焼」であります。茶の湯では、そこで出来た昔の種壺を水差などに用ゐて珍重しました。大体飾りのない、素地の荒い焼物で、そこに雅致が認められ、茶人達に好まれた窯であります。併し却つて「茶」に毒されたとでもいひませうか、態々形を歪めたりして作るので、渋味は消えて寧ろ騒がしさが目立ちます。そのためとかく横道にそれた技となりました。それよりも本当の雑器を焼く丸柱村の窯の方を取上げたく思ひます。土鍋、行平、土瓶など色々出来ますが、とりわけ丸柱の土瓶は評判であつて、多くの需用に應

85) 手仕事, pp.114-115.

86) 全書, pp.332-333.

じました。中で緑釉のものなど、特に美しく立派であります。汽車土瓶も一時この村で引受けて盛に作りました。併し丸柱の仕事は、大体江州信楽の系統を引くものといへませう。<sup>87)</sup>

### 13 清水焼（京都）

A 「慶長年間即ち今から三百三十年前頃、茶碗屋久兵衛なるもの、五条坂で金赤青の彩色をした陶器を製作した、之を此焼の開祖とする。其後寛永即ち今から八十年前に至り、野々村仁清産寧坂に窯窯し専ら茶器を作つた、其製極めて優雅高尚、忽ち清水焼の名遠近に聞えた。其後名工次第に出で、磁器ばかりを製作するものに、幹山伝七、丸屋佐兵衛、亀屋文平が居た、窯陶を製作するものには道仙、亀水等が居り、磁窯兼製するものには高橋道八、（二代目）和気亀亭、（二代目）清兵、七兵衛、清水六兵衛、清風与平、真清水蔵六等が居たのである。その製作品は、煎茶器、酒器が最も多いのである。<sup>88)</sup>

B 「この都から作り出される焼物の量も些少なものではありません。品物もあらゆるものに及び、技法もあらゆる変化に及びます。堅い磁器から柔らかい楽焼、白い白磁、蒼い青磁、藍の染付、赤の上絵、又は象嵌、絞描、流釉、天目、緑釉、海鼠釉、その他何々。共に轆轤と型。ここに陶法一切の縮図が見られます。

併し是等のものの中から、さて何を取上げようかと思ふと、意に満ちたものが如何に少いかに気付かれるでせう。昔の品を熟知する物にとつては、見劣りがしてならないからであります。ここでも形の弱さと、模様の低さが目立ちます。而も悪いことには、浅い趣味のために、仕事が遊びに終つてゐるものが多いのであります。特に茶趣味は多くの陶器を害ひました。真の茶器は、趣味の遊びから出たものではないことを忘れるからに因るのであります。併し轆轤を巧みに廻す人も絵を描く腕のあ

87) 手仕事, pp.112-113.

88) 全書, pp.344-345.



る人も、又之をよく焼き上げる人も、又窯も松薪も皆揃つてゐるのであります。而もその数は決して少くはありません。若し京都の焼物がもう一度実用に即して、健全を旨として作られるなら、見違へるほどの力を取戻すでありませう。<sup>89)</sup>」

#### 14 赤膚焼（奈良）

A 「生駒郡の生膚山で産出する陶器の名である。寛永、正保即ち今から約二十八九十年前に、野々村仁清の開創であるが、其後領主柳沢堯山公、尾張国瀬戸の陶工加藤伊之助、同次兵衛を招きて再興された、のち更に杳柏と云ふもの出で、種々の器物を製作し、赤楽をも世に出したのであった。<sup>90)</sup>」

B 「郡山は金魚の養殖を以て名がありますが、品物としてはその近くに産する「赤膚焼」が世に聞えます。釉薬に一種のおつとりとした持味がありますが、之も今出来のものは昔ほどの味ひを持ちません。<sup>91)</sup>」

#### 15 淡路焼（兵庫）

A 「文政十二年即ち今を去る九十九年前に、三原郡伊賀野村の人、加集珉平の開始であるが、此人は京都の陶工尾形周平の門弟である、一に珉平焼と称するは其名に因むので、其製品は京都の粟田焼に似て、需要極めて広い。別に七丈焼と称するものがあるが、これは其年代工人共に不詳である。三平は珉平の甥で明治初年の人である。<sup>92)</sup>」

B 「焼物は伊賀野村付近で焼かれ、主に黄色い鉛釉を用ゐます。井、皿、土瓶などを見かけます。<sup>93)</sup>」

---

89) 手仕事, pp.103-104.

90) 全書, p.329.

91) 手仕事, p.109.

92) 全書, pp.330-331.

93) 手仕事, p.111.

## 16 丹波焼（兵庫）

A 「多紀郡今田村大字上立杭，下立杭，釜屋地方に産する陶器の総称，之を区別して説明すれば左の通りである。

古丹波は，永禄，天正の頃に製作せる物の称で，今から三百五六十年前に当る，其製作品の特長としては焼ぶくれがある。遠州丹波は，寛永以後即ち今から三百年前頃，小堀遠州の好によつて焼きたる物，土は浅黄釉で鉛色の黒味がある，目方は重い。上立杭の窯は，今世の工人清水鶴吉の祖，長右衛門の開始で，農事の余暇を以て壺，鉢，徳利の類を製作し山長の銘を付して売出したものである。下立杭の窯は，今世の工人正元米蔵五代前の祖が開創で，直代の代りに至り始めて精妙の製を得て世に価値を認められた。此人の外，此作，茂作一芳などの印を刻した徳利を見ることもある。釜屋窯は，今世の工人畠井源十郎の祖父源兵衛，農業の余暇に精を出し，二石入の大壺，小鉢，摺鉢，徳利の類を製し好評を得たのであつた。それから今に及んだのである。<sup>94)</sup>」

B 「窯はその国の古い都篠山から，さう離れたところではありません。立杭と呼ぶ村で，今は兵庫県内の多紀郡今田村に属します。窯の形はごく背の低い，どちらかといふとみすばらしいもので，用ゐる土とても轆轤にかかりにくいのであります。作る品物とても，徳利とか塩壺とか大根下とか，台所の雑具が多いのであります。模様も余りなく，只流した線が主であり，色も多くは白と黒とですませます。謂はばごく貧しい姿をした焼物に過ぎません。ですがごく質素だといふことは，謙遜深い性質や淳朴な趣きを与へる原因になります。謂はば貧しさの美しさとても申しませうか。茶人達が尊んだ渋さの美が，丹波焼には自から現れてくるのであります。雑器であり乍らそのまま立派な茶器として用ゐる得るものが少くありません。かういふ品物から教へられる訓は，質素が如何に美しさの大きな原因となり得るかといふことのであります。<sup>95)</sup>」

94) 全書，pp.365-366。

95) 手仕事，pp.130-131。

## 17 備前焼「岡山」

A 「和気郡伊部村を中心として、其付近から産出さるる陶器の総称で、世人は単に備前と呼び、また伊部（印部とも書す）火櫛などの称もある。伊部は旧忌部に作り、崇神の朝十年即ち今から貳千五百年前、既に此地に忌甕が製作されたのであつた。窯の開設は応永即ち今から五百三十四年前頃で、南窯、北窯、西窯の各地に分れた、今は衰微して居る。

古備前とは、古製の備前の意味である。応永年間に製作されたのは種壺、種浸壺などの器具を作るを主としたが、之を大窯と称した。天正年間斯業大に進歩し、茶壺、茶碗、床飾などの品を製作した、後世之を古備前と称して愛玩するのである。名工に三日月六兵衛が居た、其作品には欠月の記号を付した。又一工人が居た、茶器を製する名人で、桜花の記号を付した、巧とは云ふものの欠月には劣つた。火櫛とは、一に緋櫛との字面を用ゐるが、これは紅線の束縛するが如き斑紋ある故の称、質白土で全体に葉がない古備前時代から始まつたものである。<sup>96)</sup>

B 「国の名と離れたことのない著名なものは、何と云つても「備前焼」であります。世に「伊部焼」ともいひます。伊部はもとより備前にある町の名であります。上に釉薬を施さず焼締めたもので、色は茶褐色を呈します。之が渋い味ひを示すので、早くから茶人の間に持映されました。今も煙の勢ひは絶えません。岡山には之を売る沢山の店を見られるでせう。併しどの窯でもさうですが、余り茶趣味に縛られると、仕事の本道からそれて遊びごとになつて了ひます。それに趣味の中に逃げるやうな嫌ひがあつて、活々したものを失ひます。茶器のみならず彫刻した置物の類も多いのでありますが、末期の形に沈むもの多く、之で日本を誇るわけにはゆきません。もつと平易な通常の雑器に帰つたら、見違へるほどの力を得るでありませう。<sup>97)</sup>

96) 全書, pp.371-372.

97) 手仕事, p.118.

## 18 酒津焼（岡山）

- A 「都窪郡中洲村大字酒津での製作物、明治代の開創、製品は日用の雑器に過ぎぬも、価格が低廉であるから販路は広い。<sup>98)</sup>」
- B 「倉敷市外に流れる高梁川のほとりに建つ景色のよい窯場であります。近年この窯で鉄釉の地に紋描で線を引いた井鉢を作りました。大型も小型も揃へます。調子が甚だよく、どんな台所に入つても、又卓上で用ゐられてもよいであります。<sup>99)</sup>」

## 19 萩焼（山口）

- A 「阿武郡萩町の東郊松本で製作する陶器の称、永正年間即ち今から四百二十年前頃に始まつたものとのことである、当時の作品は陶質緻密、釉色白赤を帯びて、雑器を主として製したが点茶用の茶碗も多少作られた様子である。

古萩と云ふのは、慶長三年今から三百三十年前のもので、当時朝鮮人李敬が此処で製作したのを最初とする、製作品中の茶碗は最も世に珍重されて居る。

松本萩と云ふのは、寛文年間即ち今から二百六十七年前頃、大和三輪の人、三輪弥兵衛なるもの、萩で楽焼陶器を製作した、其技甚だ精巧のため、国主毛利公召して陶器職に任じ、通称弥兵衛を改めて休雪と号せしめた。其製品は古萩と土質を異にして柔く、釉は淡泊にして青味を帯び、釉水の止まる所必ず凝滞あつて美観を呈して居る、故に在来の萩と区別して之を松本萩と呼んだのである。<sup>100)</sup>」

- B 長門の国には「萩焼」と呼ぶ名高いものがあります。萩市は毛利氏の古城のあつた所であります。港でありますから早くから朝鮮とは交通がありました。初代を高麗左衛門といふのは、もと手法を朝鮮から伝へた

---

98) 全書, p.152.

99) 手仕事, p.118.

100) 全書, pp.369-370.

ことを示します。白い厚みのある釉薬のかかつた陶器で、絵も何も無い無地のものであります。味ひがあつて早くから茶人達に愛されました。さすがに昔のは素直な出来で、温い静な感じを受けます。併し段々茶趣味が高じて来て、態々形をいびつにしたり曲げたりするので、今は寧ろいやらしい姿になりました。自然さから遠のくと美しさは消えてゆきます。かういふことがよく解つたら、今の萩焼とても、ずつとよくなるであります。<sup>101)</sup>」

## 20 尾戸焼（高知）

- A 「万治元年即ち今から二百七十年前、京都の名工野々村仁清の門人久野正伯が開始にかかる陶器、高知二代の城主退隠して竹巖院と号し、頗る茶事に心を寄せたが、遂に茶器を製作せしめんがため、正伯を浪華より呼び寄せ、城下土路尾土に窯を開きしめたものである。焼は粟田と薩摩の間、白は薩摩に似て小さきひびがある、呉須を用ゐて松竹梅などを画いてある。製作は茶器を主とせるも皿、鉢などの雑器もある。雑器は、瀬戸にも安南にも似て居る。尾戸の印あるものは近代の作である。<sup>102)</sup>」
- B 「私はここで高知市の町はづれにある一つの窯場に就いても書き添へねばなりません。「能茶山」と云ひまして、古くは「尾戸焼」の名で知られた窯場であります。ここは四国での唯一の窯らしい窯で、近在で用ゐますひと渡りの雑器を皆焼きます。甕だとか土瓶だとか壺だとか茶碗だとか、今も盛に作られます。何れも安い不断使ひのものであります。が、屢々大変美しい上りのものを見出します。凡て実用品には遊びがないので、之が品物を正しい品物にさせる原因をなすと思はれます。<sup>103)</sup>」

---

101) 手仕事, p.123.

102) 全書, p.380.

103) 手仕事, pp.139-140.

## 21 高取焼（福岡）

- A 「甲良郡西新町即ち昔の高取で製作する焼物の名であるが、慶長以後の開創、国主黒田長政朝鮮征伐から帰陣のとき、陶工二人を伴ひ帰りが、帰化して六蔵、八蔵と改名した。又加藤清正が従へ来た、新九郎と共に製陶に従事せしめた、其製作品を世に古高取と云ふ。のち多少の変遷を経たが、此高取焼には、丸に高又は高取の文字を銘じたものもあるも、古高取、遠州高取には銘印ないものが多い、中には年号と陶工名とを併記したものもある遠州高取とは、寛政年間、長政の男忠之、八蔵並に其子八郎右衛門を小堀遠州の家に遣して其指導を受け、且つ陶法に熟練した五十嵐次右衛門と共に、高取で焼かした物の称である。<sup>104)</sup>
- B 「筑前では何といつても西新町の窯を挙げねばなりません。古くから「高取」の名に於て歴史に知られた窯であります。福岡市の郊外に在つたのですが、今は市内に編入されました。この窯は所謂「遠州七窯」の一つで、茶人遠州の好みの品を焼かせた所として名が聞えます。併し他の窯の例と同じやうに、茶器の類にはよいものがなく、活々としてゐるのは大捏鉢とか、水甕とか、「うんすけ」と呼んでゐる口付徳利だとか、さういふ台所道具の類であります。形も釉薬もよく、強くて立派な感じを受けます。又ここで作る焼物の厨子も忘れ難いものであります。近頃色々な事情で仕事がやや荒れて来ましたが、若し福岡の人達がこの窯の雑器にもつと誇りを感じ出すなら、再び力を取り戻すことは決してむづかしくはないと思ひます。<sup>105)</sup>

## 22 上野焼（福岡）

- A 「慶長五年即ち今を距る三百二十八年、細中忠興封を豊前に受けた頃、朝鮮人尊楷を招き、田川郡上野村に居らしめ、俸禄を与えて製陶させたのが最初である。尊楷帰化して上野喜蔵高国と称したが、忠興移封

---

104) 全書, pp.363-364.

105) 手仕事, p.150.

の頃、其主に従ひて肥後に移つた。其十男十時孫左衛門甫久と、長男の十時孫七郎甫国、二男吉田喜藤次及び高国の四男渡久右衛門は上野に止まつた。好甫と云ふは五代孫左衛門、甫紹と云ふは文化年間即ち百二十四年前頃の孫左衛門である。<sup>106)</sup>」

B 「筑前の上野や、筑後の八代の如き、昔の勢いひは過ぎ去りました。<sup>107)</sup>」

### 23 有田焼（佐賀）

A 「西松浦郡有田町及び其付近に産出する陶器の総称で、或は伊万里焼とも称せらるるが是は小港湾を有する伊万里町に搬出されて、四方に散ずるが故である。慶長元年即ち今から三百三十二年前、豊太閤再び朝鮮を征したとき、鍋島直茂臣多く長門守に従ひて我国に来れる朝鮮国人の開設に属するので、既に前に述べた李参平が白土を泉山に採り、陶製に従事したのが最初である。分窯としては一瀬窯、広瀬窯、南河内窯、鷹房窯、外尾窯、黒牟田窯等があつた。而して有田焼には刻印はなく、万暦年製、嘉靖年製、成化年製等と支那の年号を入れ、また奇玉奇鼎之珍、富貴長春等の古語を扱ひ、藍釉にて記するを常とした、其中にも万暦の銘あるものを上品とするのである。<sup>108)</sup>」

B 「肥前の有田を中心に今も沢山に磁器が焼かれます。ここは北陸の九谷と並んで磁器の二大産地であります。磁器には大体二通りありまして素地の上に藍色の絵具で絵を描いて焼いたものと、一度焼いたものの上に更に赤、緑、黄、黒、金などの色で絵を加へ、それを再び弱い火度で焼いたものがあります。慣はしとして前のものを「染付」又は「呉州」といひ、後のものを「赤絵」とか「上絵」とか呼びます。よく寿司屋が用ゐる「錦手」の皿や鉢は皆赤絵であります。有名な祐右衛門はこ

---

106) 全書, p.329.

107) 手仕事, p.150.

108) 全書, p.332.

の上絵を試みた古い人でありました。

さて右のやうな二種類の磁器で九州出来のものを一般に「伊万里焼」と呼んできました。伊万里は産地ではなく肥前にある港の名で、ここから有田その他の焼物が船に載せられて諸国へ運ばれました。そのためこの辺の磁器を凡て「伊万里」と呼ぶやうになつたのであります。もとより生産は有田が中心でありましたから「有田焼」の名でも聞えました。この地方に磁器がかくも栄えたのは全く質のよい磁土が近くに見出されたからによります。今も窯の煙が絶えたことはなく、夥しい需用に応じます。家庭で日々用ゐる食器としては是等の磁器にまさるものはありません。磁器は特に支那、朝鮮、日本の三国が本場で、西洋では古くは発達の歴史がないのであります。

併し現に作られてゐる仕事を見ますと、残念にも四つの点で昔のものに劣るのを感じます。一つは形が弱くなり、昔のやうなふくらかさや張りを失ひました。一つは絵が段違ひに拙くなつて、活々したものがなくなりました。充分模様にこなされてゐないためとも思はれます。一つは用ゐる色が俗に派手になつて落着きを欠いてきました。之は天然の呉州が廃れ化学的なコバルトが之に代つたことが大きな原因でありませう。一つは材料が人為に過ぎて骨を持たなくなりました。無理して白さを追つたり、又余りにも火度を上げたりすることも、味ひを奪ふ原因となつたと思はれます。別に技が下つたためではなく、寧ろ醜いものを上手に作つてゐると評する方が早いでありませう。そのため仕事が盛であるに拘らず、選び得るものが案外少いのは遺憾に思ひます。古い「色鍋島」や柿右衛門風な品を上手に真似る人はありますが、単なる模写に止つて、創作の強みを持ちません。材料をもう少し自然さに戻し、形や模様や色を健かにしたら、仕事がどんなに甦つて来るでありませう。

併し幸なことに磁器を去つて陶器の世界に来ますと、昔にも負けない堂々たるものが作られてゐるのを見出します。何も凡てが優れてゐるわけではありませんが、健康なのや淳朴なものや質実なものが数多く見出



されます。只それ等のものが殆ど約束でもしたかのやうに、雑器の中のみ見られるといふことは、興味深い事実だと思ひます。茶人好みで作つた趣味の品や、贅沢に凝つて作つた高価な品には却つて活々したものが見つかりません。考へると安い品物の方に却つて美しいものが多いのですから、こんな有難いことはありません。更によく考へますと、質素な性質があればこそ、美しさが保障されて来るのだといふ真理が分ります。昔から聖人達が質素な生活と健全な生活とは深い結縁があると教へてゐるのを想ひ起します。贅沢や遊びはとかく悪の原因になることを工藝の世界でも学ぶことが出来るのであります。<sup>109)</sup>

#### 24 唐津焼（佐賀）

A 「東松浦郡唐津町で産出する陶器の総称であるが、其創始は今から約六百七年前、後醍醐天皇の御宇であるが、爾来今日に至るまで其発達変遷の順序にしたがひ米量、根拔、奥高麗、瀬戸唐津、絵唐津、朝鮮唐津等の六種に分類し、米量、根拔、奥高麗を古唐津と称し、絵唐津、瀬戸唐津、朝鮮唐津及び前記以外の掘出唐津の四種を唐津の名物と称するのである。

瀬戸唐津は、応仁から天正年間即ち今から四百六十一年前から三百五十五年前頃までに製作されたもので、黄瀬戸の釉薬を用ゐるより此名がある。

朝鮮唐津は、天正から寛永年間即ち今より三百五十五年前から三百四十年前頃まで製作されたもので土及び釉を朝鮮より輸入し、唐津の窯で焼いた物の称である。絵唐津は、慶長以後即ち今から三百三十二年前よりの製作品で、茶碗、杯、盆などの雑器が主であつて、概して薄手が多いのである。

献上唐津は、安政年間即ち今から七十四年前、唐津の城主小笠原氏が幕府に献じたから始まる。

---

109) 手仕事, pp.145-147.

掘出唐津は、寛永から享保にかけて製作せるものであるが、其当時火加減が度を過ぎて、或は歪み或は損失するが出来、工人之を不用として土中に埋めたるを、後日に至りて採掘したる物の称である。<sup>110)</sup>

- B 「この窯は歴史が古く又甚だ栄えたと見えて、今でも九州では焼物のことを凡て「唐津」といひます。固有名詞が一般名詞に高まつたのでありまして、丁度関東で焼物のことを「瀬戸物」というのと同じであります。<sup>111)</sup>

## 25 龍門司焼（鹿児島）

- A 「慶長年間即ち今から三百三十年前頃、島津侯が朝鮮から伴ひ来し朝鮮陶工の中、其上手を選びて大隅国始良郡帖佐に移したが、芳仲なるもの他の工人と共に龍門司坂の麓に窯を開き、帖佐風に製陶し始めた。即ち此陶器の名である。芳仲は薩摩焼、古今を通じての名手である。<sup>112)</sup>

- B 「薩摩の隣りは大隅の国であります。昔ここに帖佐といふ窯場があつて、苗代川と兄弟の間柄でした。幸その歴史が今は龍門司というところに伝はつて、よい仕事が見られます。特に今出来るもので美しいのは「飯鉢」と呼んでゐるもので、素地の上に白土をかけ、之に緑と飴色との釉を垂らします。色が冴えて上ると、まるで支那の有名な「唐三彩」を想はせます。安いので尚誰にも使つて欲しく思ひます。飯鉢とは、暑い地方のこと故、御飯が饑えないやうにとて作つた鉢であります。そのほか「しゆけ」と呼んでゐる蓋物や、「からから」と呼ぶ醤油注など、皆よい家庭の友となるであります。<sup>113)</sup>

以上の対比により、柳の所論が決して単に趣味の領域に留まるものではないことが示されるであろう。

110) 全書, pp.341-342.

111) 手仕事, p.150.

112) 全書, p.364.

113) 手仕事, p.148.